

介在する経験者

高 橋 将 一

1. はじめに

人間言語の統語部門における構造構築は、局所性（locality）制約により統制されている。例えば、ある要素 ϵ が、ある主要部 δ と統語的關係を形成し、その主要部の投射（projection）内に移動する場合、 ϵ は、 δ から見て同種の要素の中で最も近いものでなければならない。よって、(1) のように、原理的には移動可能な wh 句が2つ存在する場合、従属節の C（Complementizer）に最も近い wh 句である who が移動しなければならない。これは、優位性（Superiority）の効果として知られている。

(1) a. John knows who saw what.

b. *John knows what who saw. (Chomsky 1973:245)

また、移動先により近い要素が移動不可能なものであっても、より遠い要素が移動することはできない。(2) にあるように、wonder の補部（complement）の CP の指定部（specifier）に移動した wh 句は、それ以上移動することはできない。¹ しかし、そうであっても、より遠い wh 句が移動することができないことが、(3) から分かる。

本稿をまとめるにあたり、葛西宏信氏から有益なコメントを頂いた。ここに謝意を示す。

1 本論考では、議論に直接関係のない痕跡（trace）は表記しない。

- (2) a. Bill wonders [which book]₁ was published t₁ this year.
 b. *[Which book]₁ does Bill wonder t₁ was published t₁ this year?
 (Rizzi 2015:317)
- (3) *What₁ did he wonder where₂ John put t₁ t₂? (Chomsky 1973:245)

局所性制約の効果は言語の至るところで観察される一方、一見するところの制約に違反していると思われる移動が認可される事例も存在する。後の節で見るように、(4) の Mary は T (Tense) に最も近い要素であるが、顕在的移動 (overt movement) を適用することはできない。この点では (3) の事例と同様であるが、(4) では、Mary と同種のより遠い要素である John が、Mary を飛び越えて移動することが可能である。

- (4) John₁ seems to Mary [t₁ to be nice].

局所性制約の反例と考えることができるこの問題に対しては、過去に様々な解決策が提案されている (Boeckx 1999、Bruening 2014、Collins 2005、Hartman 2011、Kitahara 1997、McGinnis 1998、Stepanov 2001、Ura 1999 等を参照)。理論的想定が多岐にわたるこれらの解決策を十分に取り上げることはここではできないが、本論考では、(4) での介在要素である to Mary の意味的性質及び、それに付随する統語的特徴を利用した代案を構築する。(4) の to Mary は、経験者 (Experiencer) という θ 役割 (θ -role) を有する項 (argument) である (以下、経験者項と呼ぶ)。Landau (2010) は、経験者項には、T への非顕在的移動 (covert movement) が適用されると提案している。本論考では、この提案と、目的語 wh 句の顕在的移動に起因する局所性制約違反の回避についての Chomsky (2001) の提案を採用することで、(4)

が提起する問題を解決できることを示す。また、この解決策の帰結として、経験者項が従属節の主語の繰り上げ (raising) に対しては移動を妨げる介在要素にならないが、従属節の目的語の *wh* 移動に対しては介在要素として働くという事実を捉えられることを論じる。

まず次節では、当該の局所性制約の定義を明確にし、(4) がその制約に違反している事例であると考えられることを示す。

2. 局所性制約と経験者項を伴う主語の繰り上げ

前節で述べたように、ある主要部 δ が、ある要素 ε と一致などの統語的關係を形成しようとする場合、 ε と同種である別の要素 ζ が、 δ と ε の間に介在することはできない。これは、 ζ が潜在的に δ と統語的關係を形成できない状況でも当てはまる。Chomsky (2000) は、このことを表す事例として、(5) のアイスランド語の一致現象を挙げている。(5)a では、主節の動詞が複数形になっている。このことから、主節の T は、従属節にある主格 DP (Determiner Phrase) と一致の関係を形成していると考えられる。また、主節の動詞が単数形にはなれないことから、主節の T は、与格 DP とはそのような関係を形成することができないことが分かる。他方、(5)b では、(5)a と同じように従属節内に複数形の主格 DP が存在するが、主節の T と一致の関係を形成することはできない。主節の T と主格 DP の間に介在する与格 DP は、T と一致することはできない。しかしそれでもなお、主節の T と主格 DP との統語的關係の形成を阻害する要素となってしまう。²

2 (5)b における主節動詞の単数形は、一致の關係が形成されなかった場合のデフォルト値の現れであると考えられる。

(5) アイスランド語

- a. Mér *virðist / virðast þeir vera skemmtilegir.
 me.DAT seem.3.SG / seem.3.PL they.NOM be interesting
 ‘It seems to me that they are interesting.’
- b. Mér virðist / ?*virðast Jóni líka hestarnir.
 me.DAT seem.SG / seem.PL John.DAT like horses.NOM.PL
 ‘It seems to me that John likes horses.’

(Boeckx 2000:359, Schütze 1997)

このような事実を捉えるため、Chomsky (2000) は、(6) の欠如要素介入制約 (The Defective Intervention Constraint) を提案している。³ この制約は、 β が α と実際には統語的關係を形成することができない状況で、 β が自身と同種の γ を c 統御 (c-command) している場合、 α と γ との統語的關係の形成を禁じている。

(6) 欠如要素介入制約 (The Defective Intervention Constraint)

$\alpha > \beta > \gamma$, where $>$ is c-command, β and γ match the probe α , but β is inactive so that the effects of matching are blocked.

(Chomsky 2000:123)

それでは次に、(7) に再録する経験者項を伴う繰り上げ構文での主格 DP の繰り上げが、欠如要素介入制約に違反しているか検討する。

(7) John seems to Mary to be nice.

最初に、(6) の α に当たる主節の T が、 β に当たる経験者項と統語

3 英語の専門用語の日本語訳には、原口・中村・金子 (2016) を参考にした。

的關係を形成できるかという点を考える。当該の統語的關係は、 φ 素性 (φ -features) の一致であるが、主節の動詞が経験者項の数と一致を示すことはない。つまり、(7) のような状況では、主節の動詞は必ず主格 DP の数との一致を示す。⁴ また、 φ 素性の一致に伴い生じる可能性がある主節の TP の指定部への移動も、(8) のように、 φ 素性を有している P (Preposition) の補部の DP に対して適用することはできない。また、(9) に示すように、P を随伴 (pied-piping) させたとしても、移動は非文法的となる。これらのことから、T は、経験者項と φ 素性に関しては一致の關係を形成することはできないと考えるのが妥当である。

(8) *Gayle₁ seemed [_{pp} to t₁] that she was quite fortunate.

(McGinnis 1998:203)

(9) a. *[To Mary]₁ seems t₁ [that John is angry].

b. *[To Mary]₁ seems t₁ [a stranger to be in the garden].

(Ura 2000:418)

次に、経験者項が、移動前の位置にある主格 DP を c 統御しているかを検討する。(10) に示すように、主格 DP は、主節の主語位置に移動する前は従属節内に含まれていると考えられている。そして、過去の研究では、経験者項が従属節を c 統御していることを示す様々なデータが論じられている。

(10) [_{TP} ____ seems to Mary [_{TP} John to be nice]]

4 経験者項を伴う繰り上げ構文において、虚辞 (expletive) の there が主語位置を占める場合の興味深い一致現象が、Boeckx (1999) で観察されている。詳しくは、Boeckx (1999) を参照。

(11)a では、従属節に含まれている代名詞を、普遍量化詞 (universal quantifier) である every boy に束縛 (binding) される変項 (variable) として解釈することができる。これは、every boy が代名詞を c 統御していることを示している。⁵ また、(11)b では、否定極性項目 (negative polarity item) である any が、否定表現 no boy により認可されており、(11)a と同様の c 統御関係の存在を表している。最後に、(11)c において、代名詞と John の同一指示 (coreference) が不可能であるという束縛原理 C (Binding Principle C) 違反の効果の存在は、上記の結論をさらに裏付けるものである。

- (11) a. That dog seems to [every boy]_i to like all of his_i toys.
 b. That dog seems to no boy to like any of his toys.
 (Collins 2005:290)
 c. *Mary seems to him_i to like John_i. (Pesetsky 1995:105)

結論として、(7)における主節の T と主格 DP との統語的關係は、欠如要素介在制約が形成を禁止する環境に当てはまるため、形成することは不可能なはずである。しかし、現実的には、形成が容認され、主格 DP は、主節の TP の指定部に移動している。次節では、この問題の解決策を構築するために必要な理論的提案を導入する。

3. 欠如要素介在制約違反の回避に向けて

3.1 局所性制約の評価のタイミング

前節において、現状の分析では、経験者項を伴う繰り上げ構文での主節の T と従属節の DP との一致及び、それに付随する移動は、欠如

5 厳密には、経験者項の PP の補部である DP が従属節を c 統御していることになる。このことから、当該の P は、c 統御関係の計算に対しては不可視的な要素であるとみなされている。

要素介在制約の違反とみなされるにも関わらず認可されていることを論じた。実は、同様の問題を提起する事例は他にも存在する。本節では、問題となる事例及び、その事例を分析するために Chomsky (2001) が提案した、統語操作が局所性制約に違反しているかどうかを判断するタイミングに関する理論を概観する。この Chomsky の提案が、前節で論じた問題の解決策を構成する重要な要素の1つとなる。

欠如要素介在制約に対して問題となる他の事例は、(12) のような目的語の wh 句の顕在的移動である。

(12) I wonder what John bought.

この wh 句は、基底生成位置から最終的な移動先である CP の指定部に移動する間に、 ν P の付加位置に立ち寄ると考えられている。目的語の wh 句の ν P への付加を支持する論拠の1つとして、wh 句が表層位置より低い位置で解釈される再構築 (reconstruction) 効果を挙げることができる (他の論拠については、Nissenbaum 2000 等を参照)。(13)a では、wh 句内の代名詞 he を、普遍量化詞 every student に束縛される変項として解釈することができる。また、wh 句内の代名詞 she を、Ms. Brown と同一指示として解釈することができる。

- (13) a. Which (of the) paper(s) that he_i gave Ms. Brown_j did [every student]_i ask her_j to read carefully? (Fox 1999:174)
- b. [_{CP} [which of the papers that he_i gave Ms. Brown_j] did [_{TP} [every student]_i [_{ν P} ✓ [_{ν P} ask her_j [to read * carefully]]]]]] (Fox 1999 を参照)

2 節の (11)a と (11)c に関する議論を踏まえると、これらの代名詞の解釈の可能性は、wh 句が every student には c 統御されているが、Ms.

Brown には c 統御されていない位置で解釈を受けることが可能であることを表している。そして、その位置は、(13)b に示すように、 νP の付加位置であると考えることができる。要素は、派生の段階で立ち寄ったことがある位置でのみ解釈することができると考えられている。そのため、(13)a の再構築効果は、目的語の wh 句が、 νP の付加位置に移動していることを表しているということができる（再構築効果に関するより詳細な議論は、Fox 1999、Lebeaux 2009 等を参照）。

目的語の wh 句の移動が上記のような経路を辿るとすると、(12) に対して、(14)a を派生の中間段階として仮定することができる。この派生の段階において、T は、 φ 素性に関する一致の関係を形成しようと試みる。what も John も φ 素性を有している。しかし、動詞は、目的語の数との一致を示さないため、T から最も近い what は、T と一致の関係を形成しないと考えられる。欠如要素として what が介在しているにも関わらず、T は、John と一致の関係を形成し、(14)b に示すように、John はその指定部に移動できる。よって、(12) は、欠如要素介在制約に違反していると思われる統語操作が認可されているもう 1 つの事例と考えることができる。

(14) a. $[_{TP} T [_{\nu P} \text{what}_1 [_{\nu P} \text{John } \nu [_{\nu P} \text{bought } t_1]]]]$

b. $[_{TP} \text{John}_2 T [_{\nu P} \text{what}_1 [_{\nu P} t_2 \nu [_{\nu P} \text{bought } t_1]]]]$

しかし、(12) の文の派生は、(14)b の段階で終了するわけではない。(15) にあるように、 νP 付加位置にある wh 句は、構造に C が導入された後、その指定部に移動する。Chomsky (2001) は、この点と、英語において νP の付加位置に移動してきた要素が、その位置に止まり続ける事例がないことに着目し、(14) での T と主語 DP との統語的關係の形成は、派生の後の段階で目的語の wh 句が νP の付加位置から移動するために認可されると考える。そして、この考えを位相 (phase) と

いう道具立てを用いて理論化している。

(15) [CP what₁ C [TP John₂ T [vP t₁ [vP t₂ v [vP bought t₁]]]]]

位相は少なくとも CP と vP であると考えられており、派生において、書き出し (Spell-Out) といった操作が適用される特別な構造構築段階であるとみなされている (位相に関するより詳しい議論については、Chomsky 2000、2001 等を参照)。Chomsky は、ある統語操作が局所性制約に違反しているかどうかは、位相が構築された時点で判断されると提案している。また、移動によって残された痕跡は、統語的關係を形成する操作には不可視的であると想定する。そして、T と主語 DP との統語的關係の形成が、局所性制約に違反しているかどうかを判断する CP 位相が構築された時点では、(14)b の派生の段階では介在要素であった what は痕跡になっている。そのため、主語 DP が T に最も近い要素になり、局所性制約の違反は生じないと提案している。

経験者項を伴う繰り上げ構文における T と主格 DP との一致が誘発すると思われる欠如要素介在制約の違反も、(15) と同様の形で解決することができる事例がある。(16) では、経験者項に対して wh 移動が適用されている。⁶

(16) ?To who(m) does John seem to be smart? (Stepanov 2001:112)

(16) の派生の中間段階である (17)a 及び、(17)b では、主節の T と John の間に経験者項が介在しているが、T と John の間の統語的關係を形成する操作の適格性を判断する CP 位相の段階では、(17)c に示すように経験者項は痕跡になっている。そのため、John は T に最も近い要

6 5 節で見えるように、フランス語などでも (16) に対応する文は文法的である。この事実に対する議論については、McGinnis (1998) を参照。

素になり、局所性制約に違反することはなくなる。⁷

- (17) a. [_{TP} T [_{VP} to whom seem [_{TP} John to be smart]]]
 b. [_{TP} John₁ T [_{VP} to whom seem [_{TP} t₁ to be smart]]]
 c. [_{CP} [to whom]₂ did-C [_{TP} John₁ T [_{VP} t₂ seem [_{TP} t₁ to be smart]]]]]

しかし、問題となるのは、経験者項が顕在的に移動していない (18) のような場合でも欠如要素介在制約違反の効果は現れないことである。

- (18) John seems to Mary to be nice.

この問題を解決するために、次節では、経験者項には、非顕在的な移動が適用されるという Landau (2010) の分析を導入する。これにより、(18) も (16) と同様の形で分析することが可能になる。

3.2 経験者項の統語分析

本論考で問題としている繰り上げ構文における介在要素は経験者項であるが、経験者項は、他の θ 役割を担う項が示さない特有な統語的振る舞いを示すことが知られている (この点に関する包括的な議論は、Landau 2010 を参照)。本節では、そのような特徴を捉える Landau (2010) の経験者項の分析を概観する。Landau の提案は、繰り上げ構文において欠如要素介在制約違反の効果が観察されないことに対する

7 (17) に示すように、経験者項は、繰り上げ述語 (raising predicate) を主要部とする VP の指定部に基底生成されると想定する (経験者項の基底生成位置については、Landau 2010, McGinnis 1998, Stepanov 2001 等を参照)。しかし、(17) のままでは、経験者項が顕在的に移動しない限り、正しい語順は派生されない。4 節では、繰り上げ構文のより精緻な統語構造と派生を導入するが、そこでは語順に関する問題は解決される。

分析の2つ目の構成要素となる。

心理述語 (psychological predicate) は、その項の1つとして経験者項を選択し、その経験者項が目的語として現れることがある。⁸そして、経験者項が目的語の場合、(19)にあるように、統語範疇として PP、もしくは DP として具現化する。

(19) a. The idea appealed to Julie.

b. The show amused Bill. (Landau 2010:6)

Landau (2010) は、(20) で述べられているように、経験者項は場所を表す句であると考ええる。それゆえに、経験者項は、場所句同様 PP と分析すべきであると主張している。

(20) Experiencers are mental locations, that is, locatives. (Landau 2010:6)

この主張から、PP である (19)a の目的語だけでなく、表面上は DP である (19)b の目的語に関しても、音形を持たない P (Landau では、 ϕ_P と表記) を伴う PP と分析するべきであると提案されている。また、場所を表す句は、節の時間・空間の表示に重要な役割を果たす主要部である T と統語的關係を形成しなければならないと提案している (Landau 2010:89 を参照)。そして、この統語的關係は、経験者項である PP の TP への非顕在的移動によって確立される。これらの提案に基づくと、(19)a と (19)b はそれぞれ、(21)a と (21)b の論理形式 (Logical Form、LF) を有していると分析される。

8 (i) のように、経験者項が主語として現れる場合もあるが、本論考には直接関係しないので、ここでは取り上げない。

(i) John loves Mary.

(Landau 2010:5)

(21) a. [_{TP} [_{PP} to Julie]₁ [_{TP} [_{DP} the idea]₂ T [_{VP} t₂ appealed t₁]]]

b. [_{TP} [_{PP} ϕ_ψ Bill]₁ [_{TP} [_{DP} the show]₂ T [_{VP} t₂ amused t₁]]]

(Landau 2010:87-88 を参照)

経験者項の TP への非顕在的移動は、次節で提案する欠如要素介在制約違反を回避する分析の中枢をなすため、この移動に対する Landua の論拠をここで 1 つ取り上げる。普遍量化詞を含む wh 疑問文は、(22) のようにペア・リスト (pair-list) で答えることができる。しかし、このようなペア・リストの解釈は、いつでも可能であるわけではないことが、(23) から分かる。

(22) a. Who does every patient adore?

b. John adores Prof. Jung, Mary adores Prof. Klein, ...

(Landau 2010:106)

(23) a. Who adores every psychiatrist?

b. *John adores Prof. Jung, Mary adores Prof. Klein, ...

(Landau 2010:107)

(22) と (23) の対比を捉えるため、ペア・リストの解釈を可能にする構造条件として、(24) が提案されている。つまり、ペア・リストの解釈が可能になるのは、普遍量化詞の痕跡が、wh 句の痕跡を c 統御する時のみである。ペア・リストの解釈にこのような c 統御関係が必要な理由について、詳細に議論することはできないが、疑問文がペア・リストの解釈を生成する際は、wh 句の痕跡部分に普遍量化詞の痕跡に束縛される必要のある変項 ((25) の e₁) があるからであるというのが大まかな理由である (ペア・リストの解釈の分析の詳細については、Chierchia 1992、Landua 2010 を参照)。

- (24) At LF, the trace of the [quantified] NP has to c-command the trace of the *wh*-word for a list reading to be possible.

(Chierchia 1992, Landau 2010:107)

量化詞は、量化詞繰り上げ (quantifier raising) により TP の付加位置に移動すると想定すると、(22)a と (23)a はそれぞれ、(25)a と (25)b のような LF であると分析される。(25)a では、(24) の条件が満たされているが、(25)b では、満たされていないことが分かる。⁹

- (25) a. $[_{CP} \text{Who}_2 \text{ does } [_{TP} \text{every patient}_1 [_{TP} t_1 [_{VP} \text{adore } [t_2 e_1]_2]]]]?$

- b. $*[_{CP} \text{Who}_2 [_{TP} \text{every psychiatrist}_1 [_{TP} [t_2 e_1]_2 [_{VP} \text{adores } t_1]]]]?$

(Landau 2010:107)

一般的には、*wh* 句が主語、普遍量化詞が目的語である場合、(24) の条件を満たすことができなく、ペア・リストの解釈が不可能になると予測される。しかし、心理述語を使用した場合、この予測は成り立たない。Landau では、(26) に対してペア・リストの解釈が可能であると述べられている。

- (26) Which puppet is scaring every kid?

(Landau 2010:107)

Landau は、経験者項は非顕在的に TP に移動し、LF では主語のように振る舞うという提案でこの事実を説明している。(27)a にあるように、経験者項は、TP に非顕在的に移動した後に量化詞繰り上げされることで、実質的には (25)a と同じ LF を得ることができる。Landau で述べ

9 4.2節では、目的語は、量化詞繰り上げにより TP の内側の指定部に移動すると考える。そのような想定のもとでも、(23)a の文の LF は、(24) の条件を満たすことはない。

られているように、もし経験者項が量化詞繰り上げ適用前に TP に移動していなければ、(26) は、(27)b のように分析され、(25)b と同様にペア・リストの解釈を認可しないはずである。¹⁰

- (27) a. $[_{CP} \text{ Which puppet}_2 [_{TP} \text{ every kid}_1 [_{TP} t_1 [_{TP} [t_2 e_1]_2 \text{ is } [_{VP} [t_2 e_1]_2 [_{V'} v [_{VP} \text{ scaring } t_1]]]]]]]]]$
- b. $*[_{CP} \text{ Which puppet}_2 [_{TP} \text{ every kid}_1 [_{TP} [t_2 e_1]_2 \text{ is } [_{VP} [t_2 e_1]_2 [_{V'} v [_{VP} \text{ scaring } t_1]]]]]]]$ (Landau 2010:107)

よって、(26) のペア・リストの解釈の可能性は、Landau の経験者項の分析の論拠となる。

以上で、繰り上げ構文における欠如要素介在制約違反の回避に必要な理論的想定が整った。次節では、繰り上げ構文の統語分析を提示する。

4. 欠如要素介在制約違反の回避について

4.1 主格 DP の移動

本節では、繰り上げ構文の統語構造をさらに詳細に検討し、主格 DP が、いかにして欠如要素介在制約に違反することなく主節の TP の指定部に移動するのかを検討する。

はじめに、(17) に示したように、経験者項は VP の指定部に基底生成されると考える。よって、(28) の VP の構造は、(29)a のようにな

10 4.2 節では、経験者項は TP の内側の指定部に移動すると考える。また、脚注 9 でも触れたように、目的語の量化詞繰り上げも TP の内側の指定部への移動であると想定する。このような分析では、(26) は、(i) の LF を有すると考えられる。

(i) $[_{CP} \text{ Which puppet}_2 [_{TP} [t_2 e_1]_2 [_{TP} \text{ every kid}_1 [_{TP} t_1 \text{ is } [_{VP} [t_2 e_1]_2 [_{V'} v [_{VP} \text{ scaring } t_1]]]]]]]]]$

そして、(i) では、TP の最も内側の指定部にある量化詞繰り上げの痕跡が、vP の指定部にある wh 句の痕跡を c 統御しているため、(24) の条件を満たすことができると考える。このような想定のもとでも、経験者項の TP の指定部への非顕在的移動がない限り、(26) の文の構造が、(24) の条件を満たすことはできない。

る。脚注7でも述べたように、このままでは観察される語順を派生することができないため、VPの上に v を想定し、(29)bに示すように、Vが v へ主要部移動（head movement）すると考える。

(28) John seems to Mary to be nice.

(29) a. [_{VP} [to Mary] seems [_{TP} John to be nice]]

b. [_{VP} seems- v [_{VP} [to Mary] t_v [_{TP} John to be nice]]]

次に、主格 DP の主節の TP の指定部への移動について考える。Sauerland (2003) は、繰り上げ構文における DP の移動は、従属節の TP の指定部から主節の TP の指定部へ一足飛びに生じるものではなく、連続循環的（successive-cyclic）に生じると提案している。その論拠となるのが、(30)a のデータである。(30)a では、代名詞を普遍量化詞に束縛される変項として解釈できるのと同時に、普遍量化詞が否定より狭い作用域（scope）をとることが可能である。これは、主語が否定より低く、代名詞より高い位置で解釈可能であることを示している。これをもとに、Sauerland は、(30)b に示すように、DP は vP の付加位置に移動した後に TP の指定部に移動すると提案している。

(30) a. [Every child]_i doesn't seem to his_i father to be smart.

(Sauerland 2003:310)

b. [_{TP} [every child]_i doesn't [_{VP} t_i seem to his_i father [_{TP} t_i to be smart]]]

(Sauerland 2003:312 を参照)

この提案に従うと、(29)b の派生は、(31)a のように続く。前節までは、主格 DP が主節の TP の指定部へ移動する際に生じると考えていた欠如要素介在制約の違反は、本節の分析では、主格 DP が vP の付加位

置に移動する際に生じることになる。次節で論じるが、経験者項は νP の付加位置へは移動しないと考えられる。そうであるとなると、経験者項は、 ν と DP の間に介在する欠如要素となる。しかし、主格 DP の νP の付加位置への移動が局所性制約に違反しているかどうかは、CP 位相の段階で判断されることになる。¹¹ (31)b から (31)d に示しているように、CP 位相に至るまでに、主格 DP 及び、PP は、TP の指定部へと移動する。

- (31) a. [_{VP} John₁ [_{VP} seems- ν [_{VP} [to Mary] t_V [_{TP} t₁ to be nice]]]]]
 b. [_{TP} John₁ T [_{VP} t₁ [_{VP} seems- ν [_{VP} [to Mary] t_V [_{TP} t₁to be nice]]]]]]]
 c. [_{TP} John₁ [_{TP} [to Mary]₂ T [_{VP} t₁ [_{VP} seems- ν [_{VP} t₂ t_V [_{TP} t₁to be nice]]]]]]]
 d. [_{CP} C [_{TP} John₁ [_{TP} [to Mary]₂ T [_{VP} t₁ [_{VP} seems- ν [_{VP} t₂ t_V [_{TP} t₁to be nice]]]]]]]]]

(31)d の構造表示から明らかなように、主節の ν と従属節の TP の指定部にある DP の間に介在していた経験者項は、主節の TP の指定部へ移動したため痕跡となり、介在要素としては機能しなくなる。よって、主格 DP の νP の付加位置への移動は、局所性制約に違反しないと判断されることとなる。他の移動も全て局所性制約を満たしているため、(28) の文の文法性を正しく捉えることができる。

(31)d の構造には、3.2 節で概観した経験者項に対する Landau の分析と 1 つ異なる部分がある。3.2 節では、経験者項は TP の外側の指定部に移動すると想定していたが ((21) を参照)、(31)d では、経験者項はすでに存在する指定部の下に潜り込む形で移動している (この種

11 νP も位相であるが、繰り上げ構文における主節の νP は、局所性制約の違反を判断するような位相ではないと想定する。位相の種類とその特徴については、Chomsky (2001) を参照。

の移動操作については、Richards 1997 を参照)。Landau では、経験者項が TP の外側の指定部に移動したとしても、内側の指定部に移動したとしても、提案している枠組みとの整合性を保てるため、最終的な選択はなされていない (Landau 2010:88 を参照)。次節では、語順生成及び、繰り上げ構文におけるより長距離な DP の移動の観点から、経験者項の移動先について検討する。そして、繰り上げ構文における経験者項は、TP の内側の指定部に移動すると考えるべきであることを論じる。

4.2 経験者項の移動

前節では、Landau の経験者項の分析を使用し、経験者項が TP の指定部に移動することで、主格 DP の移動が局所性制約に違反しないことを論じた。しかし、経験者項は、移動先ではなく、基底生成されたと思われる位置で具現化する。Fox and Pesetsky (2009) では、このような移動の非顕在性を、移動した要素が階層構造上に占める位置とその階層構造を線形化する手順から導き出している。はじめに、繰り上げ構文において、経験者項が TP の内側の指定部に移動すると考えることで、その移動の非顕在性を、同じく非顕在的移動である量化詞繰り上げに対する Fox and Pesetsky の分析と同じ方法で説明できることを論じる。

Fox and Pesetsky は、階層構造を線形化する手順として、(32) を提案している。(32) は、ある主要部の指定部が 1 つしか存在しない場合、その指定部を語順上、主要部の左側に位置付け、指定部が複数存在する場合は、外側の指定部を主要部の左側に、内側の指定部を主要部の右側に位置付けるように指示するものである。

- (32) Linearization of $\text{Merge}_\beta(\alpha, \beta)$ in an SVO language with QR:
 If $\text{Merge}_\beta(\alpha, \beta)$ is a maximal projection, α precedes β . Otherwise, β precedes α .
 (Notation: $\text{Merge}_\beta(\alpha, \beta)$ is the result of merging α and β where β projects.) (Fox and Pesetsky 2009:4)

そして、(33) は、ある要素のコピーが複数存在する場合、語順上、一番左側で具現化するコピーを発音することを求める規則である。

- (33) Principle of Chain Pronunciation (PCP):
 When a occupies two positions, the linearization of a will be determined by the position that would put a further to the left.
 (Fox and Pesetsky 2009:2)

これらの提案がどのように移動の非顕在性を導き出すかを、(34) の文の派生を使用して説明する。

- (34) We saw every painting.

まず、目的語の普遍量化詞 *every painting* に対して量化詞繰り上げが適用される。この移動により、目的語は、主語より低い位置に移動すると考えられている (Hornstein 1995、Johnson and Tomioka 1997 等を参照)。ここでは、目的語の量化詞繰り上げの移動先を TP の内側の指定部と想定する (目的語の量化詞繰り上げの移動先については、Fox and Pesetsky 2009 を参照)。この想定のもとでは、(34) は、(35)a のように分析される。この構造を、(32) の手順に従い線形化すると、(35)b のようになる。注目すべき点は、TP の内側の指定部に移動した目的語のコピーは、T の補部の後、つまり文末に位置付けられることである。

さらに、PCPにより、各々の要素の一番左側のコピー以外は削除され、(35)c のようになる。

- (35) a. [_{TP} we₁ [_{TP} [every painting]₂ T [_{VP} we₁ saw [every painting]₂]]] → (32)
 b. we we saw [every painting] [every painting] → _{PCP}
 c. we ~~we~~ saw [every painting] [~~every painting~~]
 → *we saw every painting*

(35)c から明らかなように、量化詞繰り上げが、TP の内側の指定部への移動であることにより、語順に対する影響は全くなくなってしまい、この移動が非顕在的であることを捉えることができる。

繰り上げ構文における経験者項の移動も非顕在的であるが、この移動も TP の内側の指定部への移動であれば、移動の非顕在性は量化詞繰り上げのそれと同じ方法で捉えることができる。(36)a は、前節で議論した繰り上げ構文の派生である。説明の都合上、コピーは全て明示的に示されている。(32) の手順を (36)a に適用すると、(36)b に示すように、TP の内側の指定部にある *to Mary* のコピーは、最も右側に位置付けられる。しかし、PCP によりこのコピーは発音されないことになり、(36)c にあるように、正しい語順を派生することができる。

- (36) a. [_{TP} John₁ [_{TP} [to Mary]₂ T [_{VP} John₁ [_{VP} seems-*v* [_{VP} [to Mary]₂ seems [_{TP} John₁ to be nice]]]]]] → (32)
 b. John John seems [to Mary] seems John to be nice [to Mary] → _{PCP}
 c. John ~~John~~ seems [to Mary] seems ~~John~~ to be nice [~~to Mary~~]
 → *John seems to Mary to be nice*

経験者項が TP の内側の指定部に移動した場合、正しい語順が派生できるを見たが、TP の外側の指定部に移動した場合は、どうなる

のであろうか。(36) からも分かるように、TP の外側の指定部に移動した要素は、主語位置で発音されることとなる。2 節でも論じたが、(37) のように、経験者項が主語位置で具現化されることは許されない。

(37) *[To Mary]_i seems t_i [that John is angry].

よって、経験者項は、TP の外側の指定部に移動することはできないと考えられる。ある主要部の外側の指定部に移動する要素は、最初にその主要部と統語的關係を形成し、移動する要素である。T は、必ず最初に主語になれる要素と統語的關係を形成しなければならないと想定し、また、英語では PP は主語になれないと考えれば、経験者項の PP が T の外側の指定部に移動することは許されないことになる（英語において主語になれる要素についての詳しい議論は、Landua 2010 を参照）。^{12, 13, 14}

経験者項の TP の内側の指定部への移動を示す論拠は、他にもある。(38) に示すように、主格 DP は複数の経験者項を飛び越えて主節の TP の指定部に移動することができる。

12 2 節で見たように、P の補部の DP も主語になることができない ((i) に再録)。しかしこれは、(ii) にあるように、経験者項の PP からの抜き出しが不可能であることに起因すると思われる（この点については、Schueler 2012 を参照）。

(i) *Gayle_i seemed [pp to t_i] that she was quite fortunate.

(ii) *Who_i does it seem [pp to t_i] that Mary left? (Schueler 2012:169)

13 (i) のような場所句倒置 (locative inversion) 構文では、少なくとも表面上は、PP が主語であるように思える。

(i) Down the hill rolled John. (Collins 1997:10)
場所句倒置構文の統語分析については、ここでは立ち入ることはできない。

14 (31) に示す派生で述べたように、2 目以降の指定部への移動は、最初に指定部に移動した要素の下に潜り込む形になると考える。

(38) Mary seems to John to appear to Bill to be nice.

(39) に、(38) の構造分析を挙げている。(39)a と (39)b の唯一の違いは、2 つ目の経験者項である to Bill が、(39)a では従属節の TP の内側の指定部に移動しているが、(39)b では外側の指定部に移動している点である。

- (39) a. $[_{TP} \text{ Mary}_1 [_{TP} [\text{to John}]_2 T [_{vP} t_1 \text{ seems-}v [_{vP} t_2 t_v [_{TP} t_1 [_{TP} [\text{to Bill}]_3$
 $\text{to } [_{vP} t_1 \text{ appear-}v [_{vP} t_3 t_v [_{TP} t_1 \text{ to be nice}]]]]]]]]]$
- b. $*[_{TP} \text{ Mary}_1 [_{TP} [\text{to John}]_2 T [_{vP} t_1 \text{ seems-}v [_{vP} t_2 t_v [_{TP} [\text{to Bill}]_3 [_{TP} t_1 \text{ to}$
 $[_{vP} t_1 \text{ appear-}v [_{vP} t_3 t_v [_{TP} t_1 \text{ to be nice}]]]]]]]]]$

(39) a では、主節から見て次の従属節の TP の外側の指定部にある DP が、vP の付加位置に移動する。その際、1 つ目の経験者項である to John が介在しているが、これは後に移動してしまう。よって、局所性制約の違反を引き起こすことはない。一方、(39)b では、従属節の TP の内側の指定部にある DP が、to Bill と to John を飛び越えて vP の付加位置に移動することになる。上述のように、to John は、後に移動してしまうため局所性制約に対して問題とはならないが、to Bill はこれ以上移動しない。そのため、DP の移動は欠如要素介在制約に違反することになってしまう。(38) の文は文法的であるため、経験者項の TP の内側の指定部への移動は可能であると考えられる必要がある。

上記の論拠から、経験者項は TP の内側の指定部に移動すると考えられるが、どの位置からその位置に移動するのであろうか。経験者項と TP の指定部の間には vP が介在するが、(40) の対比をもとに、経験者項は vP の付加位置へは移動せず、TP の指定部に直接移動すると考える。

- (40) a. It seems to me that John is nice.
 b. *It to me seems that John is nice.

もし経験者項が vP の付加位置に移動した後に TP の内側の指定部に移動したとすると、(41)a の構造が派生される。この構造に (32) と PCP を適用し、線形化した場合、(41)b、(41)c に示すように、 vP の付加位置にあるコピーが具現化されることとなる。そのため、(40)b の非文法的な語順を生成してしまうことになる。

- (41) a. [_{TP} it [_{TP} [to me]_i T [_{vP} [to me]_i [_{vP} seems- v [_{vP} [to me]_i seems [that John is nice]]]]]]] $\rightarrow$ (32)
 b. it [to me] seems [to me] seems that John is nice [to me] $\rightarrow$ PCP
 c. it [to me] seems [~~to me~~] seems that John is nice [~~to me~~]
 $\rightarrow$ *it to me seems that John is nice

よって、経験者項は vP の付加位置には移動しないと思われる。その理由としては、経験者項が v と統語的關係を形成するために必要な素性を有していないためであると考えることができる。

結論として、繰り上げ構文における経験者項は、基底生成位置から TP の内側の指定部に移動すると考えられる。そして、経験者項がそのように移動することにより、主格 DP の移動は、局所性制約の違反を回避することができる。次節では、経験者項の移動では局所性制約の違反を回避することができない事例を取り上げ、そのような場合では、実際に、制約違反の効果が観察されることを論じる。

4.3 Wh 移動による局所性制約違反の効果

本節では、経験者項の TP の指定部への移動が、どんな局所性制約の違反でも回避できるわけではないことを論じる。議論の前段階とし

て、複数の *wh* 句を含む (42) の文を検討する。(43) には、*wh* 移動が適用される前の (42) の文の派生が示されている。

(42) Who seems to whom to be sick? (Larson et al. 2019:236)

(43) [_{CP} C [_{TP} who₁ [_{TP} [to whom]₂ T [_{VP} t₁ seems-*v* [_{VP} t₂ t_V [_{TP} t₁ to be sick]]]]]]]

局所性制約に従い、C から最も近い *wh* 句である *who* が、C と統語的關係を形成し、その指定部に移動した場合、文法的な (42) の文が生成される。もし、より遠い *wh* 句である経験者項に *wh* 移動が適用されると、(44) のような非文法的な結果となる。¹⁵

(44) *To whom does who seem to be sick? (Larson et al. 2019:236)

(42) では、主語 DP が *wh* 句であり、*wh* 移動が適用される前の段階で経験者項より構造上高い TP の外側の指定部に移動することができる。そのため、主語 DP の *wh* 移動は、局所性制約に違反しない。(42) のこの説明から、経験者項より下の位置に基底生成され、主語になる DP 以外の要素が *wh* 句となり、経験者項を飛び越える形で *wh* 移動が適用された場合、局所性制約の違反が生じると予測される。(45) に示す通り、この予測は正しいものである。

(45) *Who does John seem to who to like? (Collins 2005:290)

(45) では、従属節の目的語に *wh* 移動が適用されている。(46) は、*wh* 移動が適用される前の段階の (45) の文の派生である。(46) では、

15 (42) と (44) の対比からも、経験者項が TP の外側の指定部には移動できないことが分かる。

経験者項の *wh* 句は TP の内側の指定部にあるが、目的語の *wh* 句は、主語と違って *wh* 移動が適用される前に経験者項より高い位置に移動することはできない。よって、目的語の *wh* 移動は、局所性制約の違反となる。¹⁶

- (46) [_{CP} does-C [_{TP} John₂ [_{TP} [to who]₃ T [_{VP} who₁ [_{VP} t₂ seem-V [_{VP} t₃ t_V [_{TP} t₂ to like t₁]]]]]]]

(46) の構造で、C に最も近い *wh* 句である経験者項に *wh* 移動を適用すれば、予測する通り、(47) のような文法的な結果が得られる。¹⁷

- (47) ?To whom does John seem to like who? (Arano 2017:20)

主格 DP による TP の指定部への移動では、主格 DP は経験者項を飛び越えることが可能であるが、経験者項の飛び越えは、目的語の *wh* 句の CP の指定部への移動では認可されない。このような経験者項の飛び越えの可能性を、経験者項の TP の指定部への移動を想定する分析で正しく捉えることができる。¹⁸

5. まとめ

(48) のような繰り上げ構文において、主格 DP は、局所性制約のため経験者項を飛び越えて移動することはできないはずであり、これが、

16 (46) では、便宜上、目的語の *wh* 句を *vP* の外側の付加位置に置いたが、この点に関して、どのような想定を取ったとしても、(45) の分析に影響を与えるものではない。

17 (47) では、目的語の *wh* 句は基底生成位置で具現化されている。そのため、(46) とは異なり、(47) の文の構造では、目的語の *wh* 句は全く移動していないと考える必要がある。

18 Arano (2017) では、この問題に対して異なったアプローチを提案している。詳しくは、Arano (2017) を参照。

本論考の議論の出発点であった。

(48) John₁ seems to Mary [t₁ to be nice].

しかし、英語とは異なり、経験者項が存在することで、主格 DP の主語位置への移動が認可されない言語がある。その一例として、フランス語を挙げることができる（同様の特徴を示す他の言語については、McGinnis 1998、Ura 1999 等を参照）。(49)a の文は、経験者項が存在しなければ主語位置への移動が認可されることを示し、(49)b の文は、経験者項が存在する場合、主語位置への移動が認可されないことを示している。

(49) フランス語

a. Jean semble avoir du talent.

Jean seems to have of talent

‘Jean seems to have talent.’

b. ??Jean semble à Marie avoir du talent.

Jean seems to Marie to have of talent

‘Jean seems to Marie to have talent.’

(McGinnis 1998:90)

このような特徴を示すフランス語であっても、(50) に示すように、主格 DP の主語位置への移動が認可される事例がある。McGinnis (1998) で観察されているように、それは、経験者項が wh 移動や接語化 (cliticization) により、基底生成位置より高い位置に移動した時である。

(50) フランス語

- a. [A qui]₁ est-ce que Jean₂ semble t₁ [t₂ avoir du talent]?
 to whom is it that Jean seems to have of talent
 ‘To whom does Jean seem to have talent?’
- b. Jean₁ lui₂ semble t₂ [t₁ avoir du talent].
 Jean 3SG.DAT seems to have of talent
 ‘Jean seems to him to have talent.’ (McGinnis 1998:93, 150)

本論考で提案した、(48)での局所性制約違反の回避についての分析は、この McGinnis の洞察を拡張したものである。そして、その拡張を可能にしたのが、Landau による経験者項の非顕在的移動分析である。

しかし、(48)と(49) b の文法性の対比からも明らかなように、英語の繰り上げ構文の分析を、そのままフランス語に適用することはできない。どのような要因が、英語タイプの言語とフランス語タイプの言語を分けているのかを解明することが、研究の次のステップとなる(当該構文において、英語と同じ振る舞いを示す他の言語については、Ura 1999 等を参照。また、繰り上げ構文の言語間比較研究については、McGinnis 1998、Ura 1999 等を参照)。

参考文献

- Arano, Akihiro. 2017. On intervention in Move and Agree: A case of dependencies across experiencers. *Explorations in English Linguistics* 31:1-29.
- Boeckx, Cedric. 1999. Conflicting c-command requirements. *Studia Linguistica* 53:227-250.
- Boeckx, Cedric. 2000. Quirky agreement. *Studia Linguistica* 54:354-380.
- Bruening, Benjamin. 2014. Defects of defective intervention. *Linguistic Inquiry* 45:707-719.
- Chierchia, Gennaro. 1992. Questions with quantifiers. *Natural Language Semantics* 1:181-234.

- Chomsky, Noam. 1973. Conditions on transformations. In *A festschrift for Morris Halle*, ed. by Stephen R. Anderson and Paul Kiparsky, 232-286. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Chomsky, Noam. 2000. Minimalist inquiries: The framework. In *Step by step: Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89-155. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2001. Derivation by phase. In *Ken Hale: A life in language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Collins, Chris. 1997. *Local economy*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Collins, Chris. 2005. A smuggling approach to raising in English. *Linguistic Inquiry* 36:289-298.
- Fox, Danny. 1999. Reconstruction, binding theory, and the interpretation of chains. *Linguistic Inquiry* 30:157-196.
- Fox, Danny, and David Pesetsky. 2009. Rightward movement, covert movement, and cyclic linearization. Handout presented at Ben-Gurion University.
- 原口庄輔・中村捷・金子義明. 2016. 『増補版 チョムスキー理論辞典』東京：研究社.
- Hartman, Jeremy. 2011. (Non-)intervention in A-movement: Some cross-constructional and cross-linguistic considerations. *Linguistic Variation* 11:121-148.
- Hornstein, Norbert. 1995. *Logical form: From GB to minimalism*. Oxford: Blackwell.
- Johnson, Kyle, and Satoshi Tomioka. 1997. Lowering and mid-size clauses. In *Reconstruction: Proceedings of the 1997 Tübingen Workshop*, ed. by Graham Katz, Shin-Sook Kim, and Heike Winhart, 185-205. Universität Stuttgart and Universität Tübingen.
- Kitahara, Hisatsugu. 1997. *Elementary operations and optimal derivations*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Landau, Idan. 2009. *The locative syntax of experiencers*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Larson, Richard K., Svitlana Antonyuk, and Lei Liu. 2019. Superiority and scope freezing. *Linguistic Inquiry* 50:233-252.
- Lebeaux, David. 2009. *Where does binding theory apply?* Cambridge, Mass.: MIT Press.
- McGinnis, Martha Jo. 1998. Locality in A-movement. Doctoral dissertation, MIT.
- Nissenbaum, Jonathan W. 2000. Investigations of covert phrase movement. Doctoral dissertation, MIT.
- Pesetsky, David. 1995. *Zero syntax: Experiencers and cascades*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Richards, Norvin. 1997. What moves where when in which languages? Doctoral dissertation, MIT.
- Rizzi, Luigi. 2015. Cartography, criteria, and labeling. In *Beyond functional sequence: The cartography of syntactic structures, volume 10*, ed. by Ur Shlonsky, 314-338. New York: Oxford University Press.

- Sauerland, Uli. 2003. Intermediate adjunction with A-movement. *Linguistic Inquiry* 34:308-313.
- Schueler, David. 2012. A minimalist theory of pseudopassive. In *Proceedings of the 40th Western Conference on Linguistics*, ed. by Christina Galeano, Emrah Görgülü, and Irina Presnyakova, 161-174. Simon Fraser University.
- Schütze, Carson T. 1997. INFL in child and adult language: Agreement, case and licensing. Doctoral dissertation, MIT.
- Stepanov, Arthur. 2001. Late adjunction and minimalist phrase structure. *Syntax* 4:94-125.
- Ura, Hiroyuki. 1999. On the definition of closeness in the mechanism of *Agree*. In *Proceedings of the 2nd GLOW meeting in Asia*, 425-442. Nagoya: Nanzan University.
- Ura, Hiroyuki. 2000. On the typology of subject raising and English. *English Linguistics* 17:417-426.